特集 枕崎に未来はあるか 第2回

25年後は 人口1万7千人 65歳以上が4割!?

活力低下が懸念される各集落の未来は…

増え続ける限界集落

急激に進む少子高齢化

本市は、人口の減少とともに、少子高齢化が急速に進んでいます。国勢調査の最新データである平成17年と昭和45年とを比べると一目瞭然です。

65歳以上の総人口に占める割合は、昭和45年は9.8％でしたが、平成17年は29・4％と、35年間で急激に増え、3人に1人は高齢者という時代に突入しています。これは、全国平均の20・1％、鹿児島県平均の24・8％を大きく上回っており、本市の高齢化が進行していることがわかります。

逆に、子どもや若者の人口は減り続けています。14歳以下のいわゆる年少人口の総人口に占める割合は、昭和45年は26・2％でしたが、平成17年は12・8％と、35年間で13ポイントも減少しています。近年の全国的な少子化傾向が本市においても進行していることがわかります。

また、15歳～24歳の総人口に占める割合は、昭和45年は13・5％でしたが、平成17年は8.7％と、35年間で5ポイント減少しています。これは、中学・高校を卒業した子どもたちが、進学や就職のため市外・県外に転出していくためと考えられます。

更に、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、25年後の平成47年には、本市の総人口は17000人を下回るまでに減少し、4割以上が65歳以上の高齢者になるという予測も出されています。

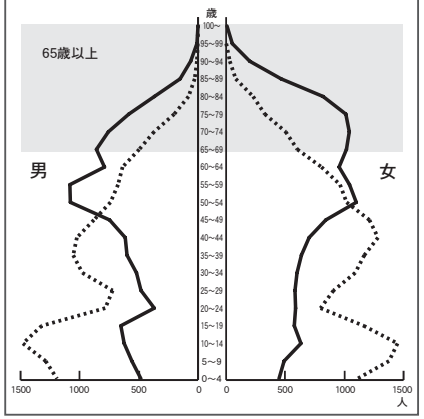
3割が限界集落に？

人口の減少と少子高齢化の進行に伴い、限界集落の増加が危惧されています。昭和45年の国勢調査における集落別人口を見ると、人口100人未満の集落は10集落でしたが、今年3月末の住民基本台帳人口では17集落に増えています。また、65歳以上の高齢者が5割を超える、いわゆる限界集落が6集落あり、そのうち2つの集落では高齢化率が7割を超えています。さらに、65歳以上の人口が既に4割を超えている集落が16集落あり、全76集落のうち約3割が近い将来限界集落となるおそれがあります。

急がれる対策

このように集落の高齢化、小規模化が進むと、従来から行われてきた集落の共同作業や行事等ができなくなり、やがては集落としての機能が麻痺し、自主的な活動ができなくなってしまいます。現在はなんとか活動を維持できていても、今後更なる高齢化の進行が予想される中、近い将来には、自主的活動が途絶えてしまうということも予想されます。そうなる前に、自主的活動を維持するための対策を講じる必要があります。

枕崎市の人口ピラミッド



田布川集落の試み

338人規模でも限界集落

金山校区内にある田布川集落は、葉たばこ、稲作、甘しょなどの栽培を行う農家が多くありました。しかし、後継者不足のため専業農家の数は激減し、サラリーマン農家や規模を縮小した零細農家が大半をしめるようになってきました。

このため、作業効率の悪い山間部の多くの農地は荒れ果て、近年では、基盤整備をした畑や集落内の田まで荒廃し始め、その荒廃地からの草木が住宅地に及ぶのも時間の問題となってきています。

また、平成元年には534人いた人口も、今年4月1日現在で338人まで減少し、高齢化率も51・2％となり、限界集落の一つとなっています。人口が300人を超える集落が限界集落となることは、市内の集落の中でも珍しいことです。

将来を見据えた取り組み

このような集落の危機を乗り越えようと集落の役員や若手の住民、集落外に居住する集落出身者が集まり、勉強会や意見交換会を始めました。

まずは、集落内で増えつつある休耕田を集落で管理する『集落営農』に取り組んでいます。そこで、各家庭の農業の現状や将来的な展望、農地の貸出し・集積、農機具の譲渡などの意向調査に取り掛かっています。

集落の将来を見据え、『いま自分たちでやらなければ後悔をする』との思いで取り組み始めた事例です。

↓次ページに「地域担当制」

限界集落 用語解説

過疎化などで人口の50％を65歳以上の高齢者が占める集落をいいます。限界集落になると、集落の整備や冠婚葬祭など社会的共同生活の維持が困難になるおそれがあります。

INTERVIEW

枕崎市自治公民館連絡協議会
久木田 征男 会長

まずは住民どうしのコミュニケーションから

少子高齢化が急激に進んでいる現在、まずは、この現状を全員が知ることが大切だと思います。あの集落は高齢者が多いから大変だとか他人事では何も変わりません。そのような集落が増えてくるということは、いずれ市全体がそうなっていくんだという危機感を持つことが大切です。少子高齢化が進む背景は様々ですが、これといった対策がないというのが現実です。そんな状況ですが、集落の住民どうしがコミュニケーションをとり、この難局を乗り切らなければなりません。集落の行事に高齢者しか集まらないというところも多くあるようですが、もっと若い人たちにも積極的に参加してもらい、活気づけてもらいたいものです。逆にそうなるように各集落も努力が必要です。今後さらに少子高齢化が進めば、集落間の垣根を越えて、助けあいの心を持ち共同で取り組んでいく必要があるかもしれません。

田布川公民館
沖園 強 館長

「集落営農」を機に深まる絆

「集落営農」への取り組みは、耕作することが困難になり、荒廃した田や畑を集落で管理するものですが、これにはほかにも効果があります。一つは、田布川の置かれている現状を自分のこととして考えるきっかけになること。もう一つは、共同作業により集落の活性化につながるということです。「集落営農」を始めるにあたり、何度も会合を重ね、住民へのアンケート調査も行いました。このような活動をしていて嬉しかったことがあります。それは、ほかの集落に住んでいる若い田布川出身者が役員を務めたり、手伝いに来たりしてくれることです。このような絆が集落を活性化させます。

「集落営農」のため会合を重ねる

▲田布川集落住民にアンケート調査をして回る上迫正幸さん（右）。「集落の方々と話をしたことで、集落営農のほかにも、いろんな取り組みができるのではないかと希望を持てるようになった」と話していました。